

機械と動物：『怒りのぶどう』に広く見られるモチーフ

A Translation of “Machines and Animals : Pervasive Motifs in *The Grapes of Wrath*” by ROBERT J. GRIFFIN AND WILLIAM A. FREEDMAN

ロバート・J・グリフィン
ウィリアム・A・フリードマン

森 政 勝 訳
Masakatsu Mori

ジョン・スタインベックの著作は「宣伝用の論文」ではないかという賑やかな取りざたが、次第におさまりかけると——このような取りざたはやめてしまうことはないといひ続けているものは今でもいる——批評家は芸術作品としての『怒りのぶどう』に真剣な注意を払い出した。性格描写（ジョード一家が「厚紙細工の人形」であろうとなかろうと）、散文文体（実際には数種の散文文体であるが特に叙景文の詩的效果）、それに、異質の章の相互関係といったこの小説の種々な面がこれまでかなり論じられてきた。さて、本論文ではこの小説に広く見られる二つのモチーフ、すなわち、「機械」と「動物」というきわめて重要なモチーフ——これはこの小説の構成とテーマの内容にかなり寄与している——に重点をおきたいと思う。この二つは「最も有力なモチーフ」であるといってもよい。しかし、このような要素を抽出することは必然的に極端なまとめ方をやることであり、そうして、この要素がこの小説の技巧や内容に欠くことのできない主要な象徴を供給するのは、従属的なモチーフや考案に対し、または非常に率直な物語、説明、討議などに対するこの要素の複雑な関係を通じてのみ可能であることを忘れてはならない。このようなことを念頭におきながら、さらに進んで、比喻的用法の方便としての、または、記号、もしくは強調的考案としての、そうして結局は、持続的な象徴としての機械と動物を考えてみよう。

ごく少数の比喻的用法——隠喩、直喩、引喩——

一だけが機械をそれ自体として利用している。「トラクターで追い出された」といういい方は言葉の目新しいあやで、オーキー〔訳者注一主としてオクラホマ州の移住農民〕が工業化された農業に用いられている怪物のような機械のために、わずかな地所から無理無理に押し出される苦境を述べるために数回繰り返して用いられている（「トラクターで追い払われた」といういい方も2、3回出てくる）。しかし、機械の隠喩的使用のこのような唯一の実例の外に、この小説の終わりのほうにただ一つ直喩がある。すなわち、洪水（³）を防ぐために土手をつくろうとしている疲れた人たちは「機械のようにガタガタ体を動かして働いた」。機械装置に用いられた隠喩は多い。すなわち、機械にはある非機械的な現象によって隠喩の媒体となる特性があるという比喻的用法が多いのである。一般的には、このような機械の隠喩的性格描写——たとえば、種まき機が土地を荒らすという場合のような——は人事に含まれる野獣性とか動物的な側面を強調する。基本的には、このような隠喩は、「太陽は真っ赤な新しい血のように赤かった」、「大地は沈む〔太陽〕の明るみの中で血の色をしていた」というような血の比喻的用法とか、「切る」という字の多用——「太陽は日陰に切り込んでいた」、「道には鋤（⁴）き跡が切り込まれていた」——というような第二義的モチーフが示す悲劇や不幸の一般的な意味に役立てようと考えられているように思われる。

機械の比喻的用法はきわめて希であるのに、動

物の比喩的用法は沢山ある。人間の性的衝動の特性描写にしばしば動物が用いられている。たとえば、ミューリー・グレイブズ（この人の名をここに出しても不適當ではない）は初めての経験の際「雄じかのように鼻息を荒くし、雄山羊のようにあばれた」と自分のことをいっており、男盛りのアル・ジョードはその際には「雄山羊のようにあばれ回り、雄ねこのように死にっぽくになる」のであった。動物の性機能は隠喩の媒体として数回出てくる。たとえば、ケイシーは信仰復興の特別集会への参加者を、「馬屋に入れられた種馬のように飛びはねる」といっている。動物の比喩的用法はしばしば人間行状の粗暴や墮落を示すのに役立つ。たとえば、「数匹のねこのように」戦う、小作人の小屋をつぶすトラクターは「犬がねずみを振り回すようにその小屋を振り回す」。ミューリーはいつも「おおかみのように意地悪であったが、今ではいたちのように意地が悪い」。ジョードの母親は、美少年フロイドの生涯は追いつめられた狂獣に比べられるといっている——「彼らはきつねをねらうように彼をねらって撃った。すると、彼は撃ち返した。彼らはコヨーテのように彼を走らせる。彼は素早くうごき、うなり続けた。ローボー〔訳者注—アメリカ西部にいる大型の灰色おおかみ〕のように意地悪い様子で」。動物の比喩的用法はもっぱら無害なふざけや気取った物腰を示すために用いられる。たとえば、ウィンフィールド・ジョードは「山羊のように臆病（おびょう）で、子牛のようにうぶ」である。アルは「掃きだめをあさる鶏」のように振舞う。しかし、数多い動物の比喩的用法中最も頻繁（きんぱん）で有意義な用法は、オーキーの苦境の実体を表わすためである。たとえば、ジョード一家は40エーカーの土地を手放すことと、「冬の穴にいる地ねずみのようにジョンの家に重なり合うようにして」生活することとを余儀なくされる。彼らは、やがては「カリフォルニアの新しいカナーン〔訳者注—理想郷をいう〕になる場所への幻滅的な旅行を始めるのである。そうして、ケイシーは家のものが逃げ出している非人間的な産業経済を述べるために、次のような暗黙の類似を用いている。

「あんた、大毒とかげが獲物をつかまえるのを

見たことがあるかね。ギュッとつかまえて二つに食い切ると、そいつの頭がブラリとなる。首のところを食い切ると頭がブラリだ。そいつをバラバラにするにゃ、ねじ回しを持ってきて、それで頭をこじ開けるんだよ。そいつがそこに倒れている間に、そのとかげが歯であけた穴に毒がトロリトロリとしたたっている」。

人々がみんな同じように骨折りながら「馬具をつけて」一緒にとどまろうと（「人間は一体となる時には神聖である」）しないから不都合が起こるのであり、人は「歯に馬銜（ばげん）をはめ、けったり、引っ張ったり、奮闘したりして、自分の進路を走って行く」ことができるものであるとケイシーは論じている。かくて、カリフォルニアへ通ずる道はすべて「ありのように走る狂気じみた人人が充満している」——「あり」の直喩は、たとえば、388頁（モダン・ライブラリーの『怒りのぶどう』）にも再び見られる。カリフォルニアではオーキーたちは仕事が手にはいると「荷馬車の馬」のように働く。彼らは「豚のように」駆り立てられ、「豚のように」生きることをしいられる。ケイシーは不幸なオーキーたちを観察し、その言葉に聴き入っていた。そうして、彼は彼らの恐怖と不満と不安を知っている。「わたしは彼らの言葉を聞き、彼らにそっと触れてみる。彼らは屋根裏部屋の小鳥のように翼をバタバタさせている。外に出ようとして、その翼を台無しにしている」。

人間動物論的に人間を語ったとしても、それは必ずしも冷たい態度であるというのではない。（「雄山羊のように騒々しい」といういい方は、元気の旺盛さを表わすためにスタインベックが用いた語彙の一つであって、軽蔑的な意味はほとんどない）。少数の軽蔑的な、動物の比喩的用法は、ほとんどすべてが、搾取するもの（銀行、土地会社、不当利得者）に適用され、被搾取者（ジョード一家やその他のオーキーたち）に適用されているのではない。ジョード一家やその他のオーキーたちが下等動物のように振舞わねばならないのは、彼らの落度からではない。このような人々の動物的生活は機械経済による侵害の結果である。さて、機械は悪いものとして、しばしば記述されている。たとえば、機械が「あばれ込んできて小

作人を押し出してしまおう」,「トラクターに乗った1人の男が12乃至(せい)14の家族にとって代わることも出来る」,かくて,オーキーたちは「わたしは自分の土地を失った。たった1台のトラクターがわたしの土地を取ってしまったのだ」と嘆きながら,新しい住みかを求めて浮浪者になるに違いない。農業は機械化された産業になったが,スタインベックはその悲劇的な結果に対しては1章全部(第19章)をあてている。

人間から仕事を奪ったトラクター,貨物を運ぶ環状線,物を作り出す機械,そのどれもが数を増した。次第に数のふえてゆく多数の家族は,広い耕作地の中でほんのわずかな土地を探し求めたり,また,道路わきの土地が是非ほしいと思ったりしながら国道を走った。土地の大所有主たちは自らを守るために協会をつくり,脅迫し,殺害し,毒ガスを使う方法を討議するために会合を持った。

オーキーたちは機械化がもたらした弊害に十分気付いていた。辛うじて生きていける賃金をかせぐための綿花摘みの仕事をさせられても,彼らはこの収入源でさえすぐ無くなることを悟る。ある人は「新しくできた綿花摘み機のことを聞いたことがあるか?」と尋ねる。

ジョード一家は自分たちが機械時代に生きること——生きようと努力していること——を知る。機械あるいは機械化された仕掛けは,全く当然のことながら,この小説の象徴使用では重要な役割を演じている(ここで「象徴使用」というのは,抽象的な特性とか概念を具体化し,あるいは,連想させるための具体的な姿——事物と出来事——の使用を意味すると承知されたい)。ある機械は「心の内の」象徴として役立つ。すなわち,この機械はこの小説中の人物に象徴的であると認められるのである。ある機械は,大体,それが使われる回数とか,非常に重大な状況とかによって,象徴的な意義を持つことが,注意深い読者には知られるのである。たとえば,第2章の「巨大な赤い輸送用トラック」は機械的産業経済の一つの縮図——大きいということ,新しいということ,動かし得るということ,大きい効率,それに,不人情(「下手な騎手」)や,信頼心の欠如さえも

——として考えられる。「真鍮(しゅう)の南京(なんぎん)錠」が大きな後方のドアの掛金から真っすぐに立っていた」。人間が生き残るためには大規模な機械化に順応しなくてはならない流動的な時代,それが現代なのである。農民はもはや(車につなぐ)連獣や荷馬車をもってしては,うまく切り抜けられる希望がなくなってきた。スタインベックは,引越しをやったり,速やかに移動したりする必要から生まれた中古車商売(第7章)を,未だ時代に順応できていない人々を食物にしている格好な代表物であると考えている。「都市の中にも,都市の場末にも,畑にも,遊休地にも,中古車置場,救援車置場。見せびらかすように飾られた看板——中古車,すばらしい中古車,安価な輸送機関——の掲げられた大ガレージ」。ジョード一家の仮の宿であるトラックは一家の苦境——移動の必要,効率的で見栄えのよい移動はできないこと,万事が頼りないこと——を適切に表わしている。「エンジンは騒々しくカチャカチャという小さな音が絶えずしていた。ブレーキ桿(かん)はガガッと鳴った。車輪からは材木性のキイキイいう音がしており,スチームの細い噴出が冷却器のキャップの頂のところの穴からシュウシュウいっていた」。スタインベックはこのトラックの象徴的な性格をはっきりさせている。すなわち,一家のものは,移住の前,最後の相談をするために顔を合わせるが,それは,そのトラックの傍らにおいてである。「家は死んだ。畑も死んだ。だが,このトラックは生き物であり,生きた力である」。この小説全般を通じていえることであるが,この場合においても,ジョード一家の苦境は,何千人もの苦境を代表している一つの例である。国道66号線は「主要な移住道路」(第12章)であり,この「長いコンクリートの道」を土地を奪われたものが動き,「逃走中の人」がいく。「日中は古ぼけて水もれのしている冷却器がスチームの柱を噴き上げ,ゆるんだ連接棒は続けさまにカタカタいい,強く打つ音がしていた。トラックの運転手や荷物を満載した自動車を運転している人たちは,気がかりなように聞き耳を立てていた。町と町との間はどれだけ離れているのか? 町と町との間が恐ろしかった。万一何かが故障すると——うーむ,万一何かが故障すると,ジムが町まで歩いて行って部分品を持ち帰るまで,われわれはここで

キャンプするんだ」。土地を奪われた農民たちは、難儀しているのが彼らだけではないことをこの道路上で知るのである。個人経営の小規模な給油所の経営者は、丁度農民がこれまでそうであったように、目下糊口(きり)の道から押し出されている最中である。トムはこの気の毒な経営者に向かって、君も間もなく巨大な移動の一部にはいるであろうと語る。そうして、国道66号線を走る種々な車は明らかに高い社会的地位〔訳者注—財産、特権などをさす〕の象徴である。ある車には「階級とスピード」がある。このような車は搾取者の横柄な戦車である。その他の車は、よりよき生活を求める被搾取者の、酷使され、その上になお荷物を満載された運搬車である。暮し向きの豊かな人たちがオーキーの悲しい車に対して示す反応は、彼らには理解と同情の念の欠けていることを表わしている。

「チェッ、おれだったらあんなぼろ自動車で出かけるのは真っ平だよ」。

「うーむ、君もおれも分別がある。あのオーキーの野郎どもには分別もなけりゃ情緒もないんだ。連中は人間じゃないな。人間というものは連中のような暮らし方はしないもんだ。人間はあんな暮らしに我慢したり、あんなに汚らしく悲惨になることなんかできないよ。連中はゴリラもいいところだ」。

オーキーたちは車が高い社会的地位の象徴であることに気づいている。したがって、無意識的に、立派な車に乗っている人はだれかれとなく信用しないのである。新しいシボレーが労働者たちのキャンプにはいってくると、彼らはその車が悶着(もんじやく)を引き起こすことを無意識的に知る。これと同じように、オーキーたちの乗っている車の状態は、彼ら自身のひどい状態と完全に似ていることを示している。ジョード一家のものが、どの方角へ向かっているのか確かめることもできないまま前進しよう——「たとえ這わなくてはならないとしても」——としているように、彼らの乗ったトラックの「ほの暗いライトが広々とした黒い国道を前方へ前方へと徐々に進んでいった」。ジョード一家の状態が段々悪くなるように、そのトラックの状態も当然のこのように段々悪くなる

(たとえば、「右側のヘッドライトは接続が不良のため明滅した」)——。小説の展開につれ、彼らの車がオーキーそのものと全く同一視されているため、車の損傷の記事は、車の所有者へのまた新しい悶着を明らかに象徴するようになる。不幸をもたらすような雨がくると、「テントの傍らには古ぼけた自動車がおかれ、水は点火用の針金を使用不能にし、また、水は気化器を不能にした」。「ゆっくりと動いてゆく水中深くにつかったトラックや自動車」の記事は続いて起こる洪水の惨状の全く明らかな合図であった。

オーキーたちの車が彼らの境遇の精密な指標であるように、彼らが飼っている動物、特にペットもそうである。トムとケイシーがジョード家の見捨てられた農場を見回す時に見つける見捨てられたねこは、土地をうばわれた者のわびしい様子を表現している(モダン・ライブラリーの『怒りのぶどう』57—60頁を見よ——そのねこは、人気(びん)を避けて腐肉を食べる動物の話をするミュリーの出現を実際に予示する)。トムとケイシーがジョンおじさんの屋敷へ着く時、現われる2匹の犬は新しい境遇を目前にする時の人間の行状を示すものである(1匹は見知らぬ人を怪しんで、用心深そうに鼻をクンクンいわせ、もう1匹のほうは起こるかも知れない危険を避けるために十分な許しを乞(こ)おうとする)。会社のトラクターが動き、小作人たちがその土地を「押し出されて」しまうと、彼らが捨てたペットは自分で生きてゆかねばならず、かくて、漸次祖先の原始的状态にまで逆戻りするのである——この逆戻りは、オーキーたちが逆境と憎悪によって駆り立てられての必死な所業に似ないこともない。「その野らねこたちは夜になると畑からそっと忍び込んできた。でも、戸口の上がり段のところでは、もはや鳴かなかった。ねこたちは月を横切る雲の影のように動いて、はつかねずみをとりに部屋へは行っていった。ジョード一家はカリフォルニアへの逃走中1匹の犬を連れている。しかし、この犬にはわが身にのしかかる新しく、かつ、急速に機械化された生活に適應するための準備はない。飼い主がガソリンと水を求めるために車を止めると、その犬は広い国道の方へとブラブラ歩いてゆく——「疾走する大きな車が近くを素早く通り過ぎると、タイヤがギイギイいった。犬は頼りなげにそれを

避け、キャンといいながら車の中央部に突っ込み車輪の下敷になった」。荒れ果てた個人経営の給油所の持主はこの悲しい光景を評していう、「国道の近くじゃ犬は長生きできねえよ。わしは1年間に2匹の犬をひき殺されてしまったんだ。もう飼わないよ。もう真っ平だ」。ジョード一家がしばらくのあいだカリフォルニアにいて、そこでの生活の冷厳な事実気づいた時、一家は移住者のための「フーバービル」〔訳者注—1930年アメリカで都市の場末などに建てられた失業者収容所〕のキャンプへと移ってゆく。彼らは仲間の求職者たちが腹をすかせ、おびえ、確信をなくしているのを知る。そこにいる1匹のペットはその場所の大体の気風と雰囲気とを如実に表わしている。「ヒョロヒョロした茶色の雑種犬がテントの回りを鼻をクンクンさせながらやってきた。その犬はいらいらし、走り出そうと身を屈めた。懸命にクンクンやっていたが、2人の男に気づくと2人を見上げ、横っ飛びして逃げた。耳を後方に向け、細いしっぽで身を守るようにお尻を締めつけながら」。しかし、ペットを飼うということは、順境の折にはだれでもが持てる愛情と同情の念を、その飼い主が持っていることを表示している。単純で「自然そのままの」ジョード家のものはペットに対しては穏当な評価をしている。彼らの仕合わせが最低である時でも、母親は楽しい将来への希望を失うことはない。「うちでも犬を飼ったらいいわ」とルースィーはいった。〔母親は答える〕「飼おうよ、ついでにねこもネ」。

さて、ペットは人間の境遇の象徴的指標として役立つものであり、その他の動物による象徴は人間の有利な立場を現わすために用いられる。スタインベックお気に入りの工夫の一つは縮図の利用である。縮図とは物語の主要な展開とは別個の事物とか事件の叙述のことであり、その叙述はその物語の意味の中核をなすものを象徴的に要約するものである。『怒りのぶどう』の終わりに近いところで、移住者たちは焚火(きり)の回りに集まって話をしている。すると、そのうちの1人が、インディアンのただ1人の勇者——彼らはこの男を射殺することを強要されていた——の体験を詳しく話し、人間の不屈の精神と品位を縮図化し、ケイシーの運命を予示するのである。

われわれは既に、動物を象徴的予示のために使

用することに気づいている(たとえば、追い出されたねこことミューリー・グレイブス)。恐らくスタインベックの最もすばらしい、象徴的縮図の使用は陸がめである。「人間自身」の粘り強さを思わせるオーキーの前進は、かめのたゆまぬ前進行動の描写の中に見事に予示されている。かめは逆境に際してもうまく前進できるようにと願いながら、ゆっくりと足を引きずって歩き、多くの昆虫とか、国道とか、かめにぶつかるように自動車の運転手がかじを曲げることとか(もっとも、ぶつからないように避けて通る運転手もいるが)、しばらくではあったがトムの上衣のポケットに閉じ込められたこととか、ねこから攻撃されたこととか、などなどといった障害があったにもかかわらず、巧みに前進してゆく。スタインベックは人間と動物の数多い類似の発見をすべて読者の想像に任せることはしない。たとえば、トムが未舗装の道路を進んでゆくと、かめの歩行との間には類似があるのである。「そのかめが土手を這い下る時、その甲羅(こうら)は種子をおおっていた土を引きずっていた……その甲羅で土の中に波状の浅い溝を掘りながら」。そうして、「ジョードは土っぽこりを後方に立てながら……土の中にかかとを少しばかり引きずりながらトボトボ歩く」(この小説のこの辺では、トムはしいたげられたオーキーたちの間に新しい生長という種子をいまだまいてはいなかった)。ケイシーはそのかめの不屈と自分がそのかめに似ていることを認める。「だが、だれもかめを持ち運ぶことはできない。みんなは仕事仕事と精を出すんだが、結局いつかは仕事を離れて歩き去るんだ——どこへとも知らずに。丁度わたしのようにだ」。しかし、この小説のこの辺では、ケイシーがかめそっくりだというのではない。というのは、惜気もなく献身できる目的を彼は未だ持っていなかったからである。『『どこへともなく行くんだ』と彼は繰り返している。『それでいいんだ。あれはどこへともなく行くんだ。あれとはわたしのことだが——わたしはどこへ行くのか自分でも分からないんだ』」。

かめとか「ヒョロヒョロした灰色のねこ」とかいうように動物を用いてのまとめ方は非常に重要な箇所でも数回出てくる。そうして、しばしば、人の性格が、下等動物への反応とか、そういう動物の取扱いによって表わされる。トムとケイシー

が砂っぽりのひどい道を歩いていくと、1匹の
ゴーパー・スネイク〔訳者注—アメリカの南部に
いる無毒の大へび〕がスルスルとその道を横切って
いく。トムはじっと目をこらしてそれを見、それ
が無害であることを知って「『そっとしておいて
やれよ』」という。トムは残酷でもなく、悪意が
あるのでもないが、差し迫った災難を防いだり止
めたりする必要は認める。この小説のそれより後
のところでは、一匹の「ガラガラへびが道路を這
って横切った。トムはそれをたたき、引き裂き、
のたうち回らせた」とある。オーキーへの搾取
は、小作人が余儀なく売るようになる一つがいの
栗毛の馬の購入に支払われたばかりで不当な価格
によって象徴されている。栗毛の馬の購入で、搾
取者たちは小作人の経歴、愛情、労働などの一部
を買っているものであり、増大する世智辛さが取引
条件の一つである。「あんたは何年分もの畑仕事
を、太陽の下(と)での骨折り仕事を、買っていな
さるんだ。あんたは口の利(き)けない悲しみを
買っていなさるんだ。だが、そういう事実をじっと
見てもらわなくちゃあネ、あんた」。

この小説は到るところで動物に象徴的な意味を
持たせている。オーキーたちはカリフォルニアへ
の旅が決して楽しい慰安旅行にはならないことを
知っていたが、その旅に出発しようとしていた時
——彼らはその旅と、それが終わってからの生活
が、どんなに悲惨なものであるかはほとんど知ら
なかったが——不吉な「のすりの影が地上をスー
ッと横切った。そうして、家族のものはみんな、
スーッと飛んで行く黒い鳥を見上げた」。動物を
縮図や前兆としてはっきり使用していることを考
えてみると、動物へのその他の言及——それは普
通ならば偶然的なものであるかもしれないが——
が人間の行動や難儀に故意に対応されていること
が容易に分かる。産業経済の広汎、急速で、機械
的な動きの中でとらえられる小作人の苦境への、
鮮かな比較がここにある（大きな国道は絶えず象
徴的な現象を運搬するものである）。次のよう
である。

1匹の野うさぎが光の中に現われたが、はねる
たびに大きな耳をパタパタ動かして、のんびり
と飛び回りながら先方をピョンピョンとんだ。
そのうさぎは時折道を離れようとしたが、暗闇

の壁に押し返された。ずっと前方に明るいヘッ
ドライトが現われ、彼らの方へ近付いてきた。
そのうさぎはちゅうちょし、たじろぎ、方向を
変えてドッジの小さいライトの方へ駆け出し
た。うさぎが車輪の下にはいった時、小さく静
かな動揺があった。前方からやってきた車がヒ
ューッと通り過ぎた。

自分たちが飛び込んだ不幸からなんとか抜け出そ
うと、疲れたオーキーたちがフーバービルに集ま
った時、たった一つの灯火の回りを幾つかの蛾が
狂ったように飛び交っていた。「明りを慕う虫が
かんでらの中へ押し入って身を焦がし、暗の中へ
落ち込んでしまった」。そのキャンプにいる用心
深い雑種犬がオーキーの気弱な疑惑の念を表わし
ているのに、夜うろつき回る横柄なスカンクは、
キャンプ生活をしている人たちをこわがらせる尊
大な代理人や土地の所有主を連想させる。オーキ
ーたちは動物のように駆り立てられ、動物のよう
に生きることを余儀なくされる。そうして、彼ら
が短期間の雇われ主から受ける待遇は、農場の動
物に与えられる待遇にも及ばないことがしばしば
である。

仲間のものは連獣を持ち、畑を鋤(す)いたり、
耕したり、草刈りをしたりするのにそれを使
い、仕事がなくとも、その動物たちを飢え死に
させようなどとは考えなかったろう。

動物たちは馬であり——おれたちは人間なん
だ。

『怒りのぶどう』では、機械も動物もともに効
率的な象徴の手段であることをわれわれは見てき
た。機械と動物のモチーフはしばしば結合して、
二重に豊かなイメージや象徴を産み出すのであ
る。かくて、銀行は奇形動物、いや「機械的な」
怪物と見なされる。「銀行は機械であると同時に
主人でもあった」。小作人が以前耕作をしてやっ
た人々は責任というものを軽蔑する。「銀行は怪
物だ。人間とは似てもつかないものだ」。銀行が
送り込むトラクターは銀行と同じように怪物であ
る——「しし鼻の怪物で、土を持ち上げ、鼻づら
を土の中に突っ込みながら、垣を通り、家の回り
の庭を通り、真っすぐな列をなして峡谷を出たり

はいったりして、その土地を縦断し、あるいは、横断する」。そして、トラクターを運転するのは最早人間ではなく、「怪物の一部、席についているロボット」である。このような怪物を抑えられないオーキーたちの無能力さは土地を奪われたものの狂おしい挫折感を表わしている。ジョードの祖母はトラクターを射殺しようとそのヘッドライトの一つをとってしまいが、その怪物は彼らの土地を動き続ける。機械を使つての新しい農業は、土地との個人的な接触をもつ旧来の農業とは著しい相違がある。新様式の農業は手軽で能率的である。「ひどく手軽なので仕事の驚異は感じなくなる。ひどく能率的であるので土地や耕作にも驚異は感じなくなる。その驚異の感じとともに深い理解も深い関係も無くなる」。

スタインベックの小説では、機械は通常、不幸を引き起こす道具であり、その指標でもあることをわれわれは見てきた。しかし、機械は自動的に、あるいは必然的に、スタインベックにとっては都合の悪いものであると仮定するのは大変な間違いであろう。機械は「道具」であり、正しい人の手にあれば幸運を招く道具ともなり得る。例の・かめが国道を横切ろうとすると、ある運転手はそれをひきつづそうとし、あるものはそれを見のがすために道をよけるのであり、そのかめはハンドルの後方にだれがいるかで生死が決まるのである。アルとトラックの間柄は機械時代への順応という複雑な問題を示す。彼はモーターの知識があるので、トラックの世話もできたし、うまくそれを利用することもできた。彼は時代に即した力量があるというので、家族会議では責任のある地位につくことを認められる。彼は「その車の指導者」となる。若者たちはその時代の機械と大変よく協調しているが、年配の人たちは産業経済の急迫した事態に適応する用意がないのである。

ケイシーはトムの方を向いた。「お前たちのようなものがどうやって車を修理できるか滑稽(ふざ)な話だ。灯をすぐ持ってきて直してみろ。わたしはどんな車も直せなかったが、お前が直すのを今見ていてさえだめなんだ」。

「子供の時分から、大きくなったら車になるつもりでなくちゃ」とトムは言った。「車のことを知っているというのではない、それ以上な

んだ。子供たちは別にそうしようと思わなくても、車を取りこわすことなら出来るよ」。

小作人を土地から押しやったトラクターは、本来、害のあるものではない。不当な搾取を表わすものであるに過ぎない。中間章の一つ（第14章）でスタインベックは、機械がそれ自体としては善悪いずれにも属さない価値をもつものであるという考えを示している。

トラクターは悪いものなのか？ 長いあぜを起こす力は宜しくないものなのか？ このトラクターがわれわれのものであれば、それは善いものになるだろう——おれ1人のものではなく、われわれ全部のものになったら。もしわれわれのトラクターが長いあぜを起こしたら、そのトラクターは善いものになるだろう。おれ1人の土地ではなく、われわれの土地なら。われわれは土地が自分たちのものであった時、その土地を愛したと同じように、このトラクターを愛することができるであろう。しかし、このトラクターは二つのことをやる——土地を起こすことと、われわれをその土地から追い出すことだ。トラクターと戦車はいくらも変わらない。人はその両方のものに追い立てられ、脅迫されるのだ。

一層大きく一層よい収穫をあげることのできる科学や科学技術と比べると、機械はそれだけでは進歩に十分役立つものではない。そこには人間による理解と協力がなくてはならない。オーキーたちは——彼ら自身の落度からではなく——今日まで、工業化を促す機械に順応することはできなかった。『怒りのぶどう』の最後に近いところで、母親は、一家の生活の大変必要なものになっていたトラックを運転できるただ1人の居残り者がアルであるので、彼に向かって、家を見捨てないようにと嘆願する。洪水がジョード家のあたりにそっと近づくと、そのトラックは水浸しになり動かなくなる。しかし、この小説は機械への人間の関与についての希望に満ちた言葉で終わる。そうして、われわれはオーキーたちが（あるいは少なくともその子供たちが）結局は、機械によって方向づけられる社会に同化することができるというこ

とを推察できる。

ある批評家はスタインベックが動物的イメージや象徴に非常に熱心であったことに気づき、人間に対するスタインベックの見解を「生物学的」であると呼んだ。こう呼ぶのはスタインベックの作品の度重なる誤読によるはなはだしく手を抜いたまとめ方である。『ぶどう』における動物のモチーフは、人間が下等動物によく似ているとか、よく似ているに違いないというようなことを少しも示してはいない。オーキーたちはその地方を、ありのように這い回り、豚のように生き、ねこのように仲間げんかをする。これは主として、彼らがこのような動物的生活をするように余儀なくされているからである。人はトボトボと進行を続けることができる。丁度かめのように。しかし、人は自分の目標を、やはり意識することができるようになり、その目標達成には新しい手段を慎重に使用することができる。人間の進行は盲目的である必要はない。というのは、人間は自分自身やすべての仲間のもの改善を可能にするためには、人間の知識と人間の愛情を結びつけ、科学と科学技術を手際よく使うことができるからである。スタインベックは小説中では1度もユートピアのことには触れていないが、そのすぐれたモチーフはユートピア的な社会が可能であることを示している。

すぐれたモチーフが小説の表現形式と意味に有力な重要性を持っていることは、前記の研究の基本的な仮定である。このようなケースでは、われわれは、機械や動物への種々な言及の複雑巧みな

取扱いが、20世紀アメリカ文学の記念碑の一つとしての『怒りのぶどう』の優秀性の本質的要因であると主張する。機械や動物が到るところに出てくる——すなわち、モチーフの本質となるこのような構成要素の繰り返し——ので、そのような言及はこの作品の統一に非常な貢献をなしている。たとえば、ジョードのことを書いている章と、ジョード家の説明が明らかにする意味を総括する章とを結びつけるに役立っている。ある動物は、この小説の文字通りの意味では、重要な役割を果たしているが、これはまた、他の動物や機械とともに、この小説の主要な進展や「テーマ」を強調する役目をなしている。ある動物や機械はこの物語の状況の中では、明らかに象徴的であり、なお、その他のもの（たとえば縮図など）は、その明らかなで附随的な記述が最初に表示するように見える意味以上に大変意義深いものであることが分かる。内心的でもあり微妙でもある象徴——相関的な諷刺への言及、あるいは、言葉のあやなどによって強化されたような象徴——は、総合的な意味が一層明確にされるばかりでなく、非常に豊かなものにされるように組み合わせられており、互に張り合っている。モチーフをこのように考察したからといって、この本の立派さをなくすわけではなく、このような論議がスタインベックの小説を、芸術の完璧かつ複雑な作品として、十分に理解するに役立つことができればよいとわれわれは望むものである。

（「JEGP」LXII（1963年4月）所載）